

章末問題

20.1 直交座標系で表されたラプラシアンを球面座標系で表せ。

WEBdivergenceLaplacian を参照のこと

20.2 WEB Angular momentum をみて以下を証明せよ。

$$(a) \left[\hat{L}^2, \hat{L}_\pm \right] = 0, (b) \left[\hat{L}_+, \hat{L}_- \right] = 2\hbar\hat{L}_z, (c) \left[\hat{L}_z, \hat{L}_\pm \right] = \pm\hbar\hat{L}_\pm$$

解答例

$$(a) \left[\hat{L}^2, \hat{L}_\pm \right] = \left[\hat{L}^2, \hat{L}_x \pm i\hat{L}_y \right] = \underbrace{\left[\hat{L}^2, \hat{L}_x \right]}_0 \pm i \underbrace{\left[\hat{L}^2, \hat{L}_y \right]}_0 = 0$$

$$(b) \left[\hat{L}_+, \hat{L}_- \right] = \left[\hat{L}_x + i\hat{L}_y, \hat{L}_x - i\hat{L}_y \right] = \underbrace{\left[\hat{L}_x, \hat{L}_x \right]}_0 - i \underbrace{\left[\hat{L}_x, \hat{L}_y \right]}_{i\hbar\hat{L}_z} + i \underbrace{\left[\hat{L}_y, \hat{L}_x \right]}_{-i\hbar\hat{L}_z} + \underbrace{\left[\hat{L}_y, \hat{L}_y \right]}_0 = 2\hbar\hat{L}_z$$

$$(c) \left[\hat{L}_z, \hat{L}_\pm \right] = \left[\hat{L}_z, \hat{L}_x \pm i\hat{L}_y \right] = \underbrace{\left[\hat{L}_z, \hat{L}_x \right]}_{i\hbar\hat{L}_y} \pm i \underbrace{\left[\hat{L}_z, \hat{L}_y \right]}_{-i\hbar\hat{L}_x} = \pm\hbar\hat{L}_\pm$$

20.3 WEB Angular momentum をみて以下を証明せよ。

$$\hat{L}_\pm |l, m\rangle = \hbar\sqrt{l(l+1) - m(m \pm 1)} |l, m \pm 1\rangle = \hbar\sqrt{(l \mp m)(l \pm m + 1)} |l, m \pm 1\rangle$$

解答例

WEB Angular momentum の式(36)より

$$\hat{L}_\pm |l, m\rangle = C_{lm}^\pm |l, m \pm 1\rangle$$

とする。波動関数は規格化されているとすると、

$$\left(\hat{L}_+ |l, m\rangle \right)^\dagger \left(\hat{L}_+ |l, m\rangle \right) = |C_{lm}^+|^2 \langle l, m+1 | l, m+1 \rangle = |C_{lm}^+|^2$$

$$\left(\hat{L}_+ |l, m\rangle \right)^\dagger = \langle l, m | \hat{L}_- | C_{lm}^+|^2 = \langle l, m | \hat{L}_- \hat{L}_+ | l, m \rangle$$

となる。Web Angular momentum の(41)式より

$$\hat{L}_- \hat{L}_+ = \hat{L}^2 - \hat{L}_z^2 - \hbar\hat{L}_z, \hat{L}_+ \hat{L}_- = \hat{L}^2 - \hat{L}_z^2 + \hbar\hat{L}_z$$

なので、

$$C_{lm}^+ = \sqrt{\langle l, m | \hat{L}^2 - \hat{L}_z^2 - \hbar\hat{L}_z | l, m \rangle} = \hbar\sqrt{l(l+1) - m(m+1)}$$

となる。同様に,

$$C_{lm}^- = \sqrt{\langle l, m | \hat{L}^2 - \hat{L}_z^2 + \hbar \hat{L}_z | l, m \rangle} = \hbar \sqrt{l(l+1) - m(m-1)}$$

従って

$$\hat{L}_{\pm} | l, m \rangle = \hbar \sqrt{l(l+1) - m(m \pm 1)} | l, m \pm 1 \rangle = \hbar \sqrt{(l \mp m)(l \pm m + 1)} | l, m \pm 1 \rangle$$

20.4 WEB Angular momentum をみて以下の式がどうなるかを示せ。

$$\hat{L}_x | l, m \rangle = ?, \hat{L}_y | l, m \rangle = ?$$

解答例

$$\hat{L}_x = \frac{1}{2}(\hat{L}_+ + \hat{L}_-), \hat{L}_y = \frac{1}{2i}(\hat{L}_+ - \hat{L}_-)$$

となるので,

$$\hat{L}_x | l, m \rangle = \frac{\hbar}{2} [\sqrt{(l-m)(l+m+1)} | l, m+1 \rangle + \sqrt{(l+m)(l-m+1)} | l, m-1 \rangle]$$

$$\hat{L}_y | l, m \rangle = \frac{\hbar}{2i} [\sqrt{(l-m)(l+m+1)} | l, m+1 \rangle - \sqrt{(l+m)(l-m+1)} | l, m-1 \rangle]$$

である。ちなみに期待値は,

$$\langle l, m | \hat{L}_x | l, m \rangle = \langle l, m | \hat{L}_y | l, m \rangle = 0$$

となる。

20.5 図 20.2 より, $(n, l) = (1, 0), (2, 0), (2, 1), (3, 0), (3, 1), (3, 2)$ の時の動径波動関数の節の数が $n-l-1$ であることを確認せよ。

解答略

20.6 図 20.6 は, Au 表面からの XPS スペクトルであり, 横軸の束縛エネルギーは電子がそこまで詰まっているフェルミ準位とのエネルギー差である。

以下を確認し, そうなる理由を説明せよ。

- 1) 主量子数が小さければ、束縛エネルギーは大きくなる。(20.30)式と比較せよ
- 2) 主量子数が同じでも s, p, d, f 軌道の順に束縛エネルギーは大きくなる原因は何か？20.6 節を参考にせよ。
- 3) s 軌道は単一のピークとなるが、p, d, f 軌道は 2 本に分裂する。なぜか？

21.1.2 節を参照のこと

- 4) $j=l-1/2$ と $j=l+1/2$ のピーク強度が、 $2l$ 対 $2l+2$ となることを確認せよ。
- 5) ピークの分裂の大きさは、21.1.2 で $E^2/l(l+1)$ に比例することを示すがそれを確認せよ。

解答略

20.7 ほぼ孤立した二価のカチオン Fe^{2+} をもつ $\text{FeSO}_4 \cdot n\text{H}_2\text{O}$ に磁場をかけたところ、磁場の方向に Fe^{2+} の電子スピンの向きがそろって常磁性を示した。電子スピンは遷移金属である鉄の 3d 電子が寄与するとしてよい。

- a) 孤立した二価のカチオン Fe^{2+} の 3d 電子数はいくつか？
- b) フント則に従う電子配置をすると、全スピン角運動量 S の値はどうなるのか？スピン配置も記せ
- c) 二価の Fe^{2+} カチオンをもつヘキサシアニド鉄(II)酸カリウム $\text{K}_4[\text{Fe}(\text{CN})_6]$ は常磁性を示さない。この物質は Fe^{2+} イオンの $\pm x, \pm y, \pm z$ 方向に 6 つのシアノイオン CN^- が配位して、その影響で 5 重縮退した 3d 準位が分裂して、エネルギーの低い 3 重の準位とエネルギーの高い 2 重の準位に分裂する。この準位の分裂が大きいときエネルギー全スピン角運動量 S の値はどうなるのか？スピン配置も示せ。
- d) 5 重縮退した 3d 準位が分裂して、エネルギーの低い 3 重の準位とエネルギーの高い 2 重の準位に分裂するのはなぜか？図 20.5 の d 軌道の空間対称性を考慮せよ。

解答例 a) 6

b) $S=2$ $\uparrow\downarrow \uparrow \uparrow \uparrow \uparrow$

c) $S=0$ 下の準位 $\uparrow\downarrow \uparrow\downarrow \uparrow\downarrow$ 上の準位 $\text{---} \text{---}$

d) シアノアニオンが存在する $\pm x, \pm y, \pm z$ 方向に d 軌道が張り出している

と負電荷同士の静電反発でエネルギー準位が上昇する。 $3d_z^2$ と $3d_{x^2-y^2}$ の2つの軌道がそれに対応する。 $3d_{xz}$, $3d_{yz}$, $3d_{xy}$ の3つの軌道は軸上にはないので、静電反発は小さい。これが、エネルギーの低い3重の準位とエネルギーの高い2重の準位に分裂する理由である。